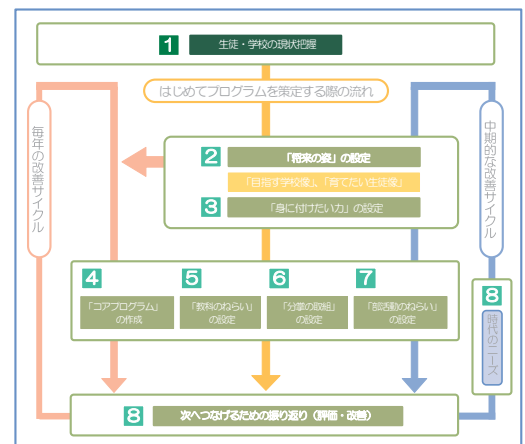


生徒・学校の実態に合ったキャリア教育の推進のために

キャリア教育の充実にあたっては、生徒が将来を見据え、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を身に付けることができるよう、キャリア教育プログラムを学校全体で検討し、策定・改善する必要があります。

その際、まず、生徒の実態や学校・学科の特色、現在行っている取組の成果と課題等を把握することから始まります。同時に、保護者や地域等のニーズについても押さえておくことが大切です。

各学校において、把握した状況を教職員全体で共有し、生徒のキャリア発達を促すために、重視すべきことを明らかにし、キャリア教育プログラムの策定や改善を行きましょう。



Point 1

生徒や教職員、保護者、地域等の評価を活用し、多面的に捉える。

Point 2

学校自己評価や学校関係者評価等を活用する。

Point 3

生徒との日々の関わりから感じていることを大切にする。

現状把握に向けたインプットとアウトカム

INPUT

- 前年度の振り返り（学校自己評価等の結果）
- 「目指す学校像」、「育てたい生徒像」
- 生徒、教職員アンケート
- 保護者、事業所アンケート
- 生徒との関わりから感じていること 等

OUTPUT 生徒・学校の現状把握

OUTCOME

- 生徒、学校の強みと弱みの把握
- 実態に合ったキャリア教育の方向性の確認 等

IN

「生徒・学校の現状把握」を行うにあたっては、生徒や学校の様子を捉えた学校自己評価や学校関係者評価と、学校の方向性を示す学校の経営方針を活用します。

IN

生徒との日々の関わりから感じていることを生徒の実態把握に反映させるために、ホームルーム担任や教科担任等、様々な立場から意見をもらうようにします。

OUT

把握した状況をもとに、「将来の姿」や「キャリア教育をとおして身に付けたい力」、取組内容等を設定・作成することで、より効果的なキャリア教育プログラムを構築していきましょう。

現状把握の際に押さえておくべきこと

1 方向性の確認

- 「目指す学校像」や「育てたい生徒像」を確認しておきます。

教員だけでなく、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー、就職支援相談員等、生徒に関わる職員からも学校の取組の成果や課題を聞き取っておきましょう。

2 情報収集

- 現状把握に必要な情報について、「いつ」、「何を」、「どのように」入手するかを整理しておきます。
- 日々の教職員間や生徒との会話、学校の雰囲気等から、生徒や学校の状態を把握しておきます。



TOPICS

現状を把握する方法の例

下の表は、生徒や学校の現状を把握する方法と、そのメリットとデメリット等をまとめたものです。

現状把握のほか、目標の設定や活動の洗い出し、プログラムの構築等においても活用することができます。



	ポートフォリオ	アンケート	ワークショップ	話し合い
メリット	多面的に生徒を捉えることができる。	他の人や環境の影響を受けない意見を収集しやすい。	一部の人の意見に偏りにくい。	共有化を図りやすい。
	定性的な把握がしやすい。	定量的な把握がしやすい。	自分の意見を反映させやすい。	準備に時間がかからず、実施しやすい。
	学習状況や思考の変容を確認することができる。	一人ひとりの考えと、全体の傾向を把握しやすい。	限られた時間で取り組むことができる。	新たな気づきを得やすい。
デメリット	生徒の成長を継続して捉える必要がある。	目的を明確にしておかないと、結果があいまいになる。	グループによって話し合いの深まりが異なる。	一部の人の意見に影響を受けることがある。
	書き込みファイルの整理等に時間がかかる。	全員の意見を収集できないことがある。	ファシリテーター等のリーダーが必要となる。	意見を引き出すためには、ファシリテーターに力量が必要となる。
	一部の教員の評価に偏る可能性がある。	記述式の場合、取りまとめる人の主観が入る場合がある。	準備に時間がかかる。	すべての教職員が参加することが難しい。
例	パーソナルポートフォリオ	記述式	KJ法 (※)	任意のグループ
	テーマポートフォリオ	選択式 (3件法、4件法)	SWOT分析 (※)	教科や学年、分掌等の単位

(※)P23を参照してください。

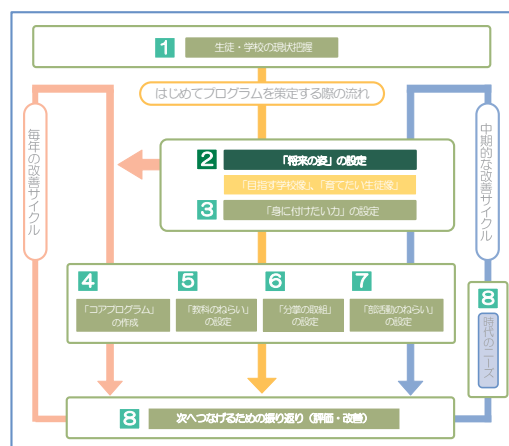
- 現状を把握する方法はたくさんあります。学校の実態に応じて、適切なものを利用してください。
- 複数の方法を用いることで、より客観的に現状を把握することができます。

変化の中で生き抜く力を身に付けるために

三重県版キャリア教育プログラムシートでは、「将来の姿」を、高校や大学等を卒業して5年から10年程度経過した頃の姿としています。

人が他者や社会との関わりの中で担う役割は、生涯という時間的な流れの中で変化していきます。人は、職業人や家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を果たす過程で、取捨選択や創造を重ね、社会における自己の役割を探し続けます。

生徒が主体的に未来を切り拓くために、今後想定される社会の姿から地域や社会が求める人物像を確認し、「将来の姿」を設定しましょう。

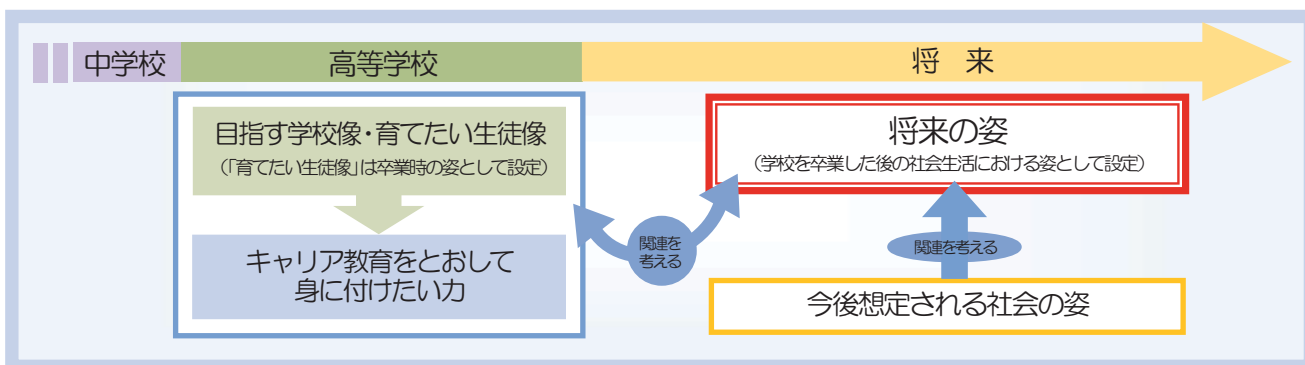


Point 1

生徒の将来の社会生活における姿を見とおした取組につなげる。

Point 2

「将来の姿」は、毎年変化するものではないので、中期的に点検する。



設定に向けたインプットとアウトカム

INPUT

- 卒業生の活動状況（追跡情報）
- 地域産業の現状と課題
- 地域の雇用の状況や課題
- 生徒、保護者、地域のニーズ 等

OUTPUT 「将来の姿」の設定

OUTCOME

- 地域社会や地域産業を支える人材育成
- 地域産業の持続と活性化 等

IN

地域産業の活性化や雇用の確保は、生徒の将来に関わる切実な課題です。グローバル化への対応はもとより、生徒が将来直面する可能性のある課題を捉えておく必要があります。

今後想定される社会の姿の例

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 産業・経済のグローバル化 | 人口減少や少子高齢化の進行 |
| 技術革新等によるライフスタイルの変化 | 技術者・技能者の後継者不足 |
| 文化・観光面における交流・連携の拡大 | 地域コミュニティのニーズの増加 |

設定の際に押さえておくべきこと

1 社会における課題の理解

○社会で求められる仕事の変化や経済情勢、ビジネスのグローバル化等、社会の課題について理解しておきます。

2 卒業生の状況把握

○進学先での学習状況や就職先での定着状況等に関する情報を様々な機会をとおして収集し、整理しておきます。

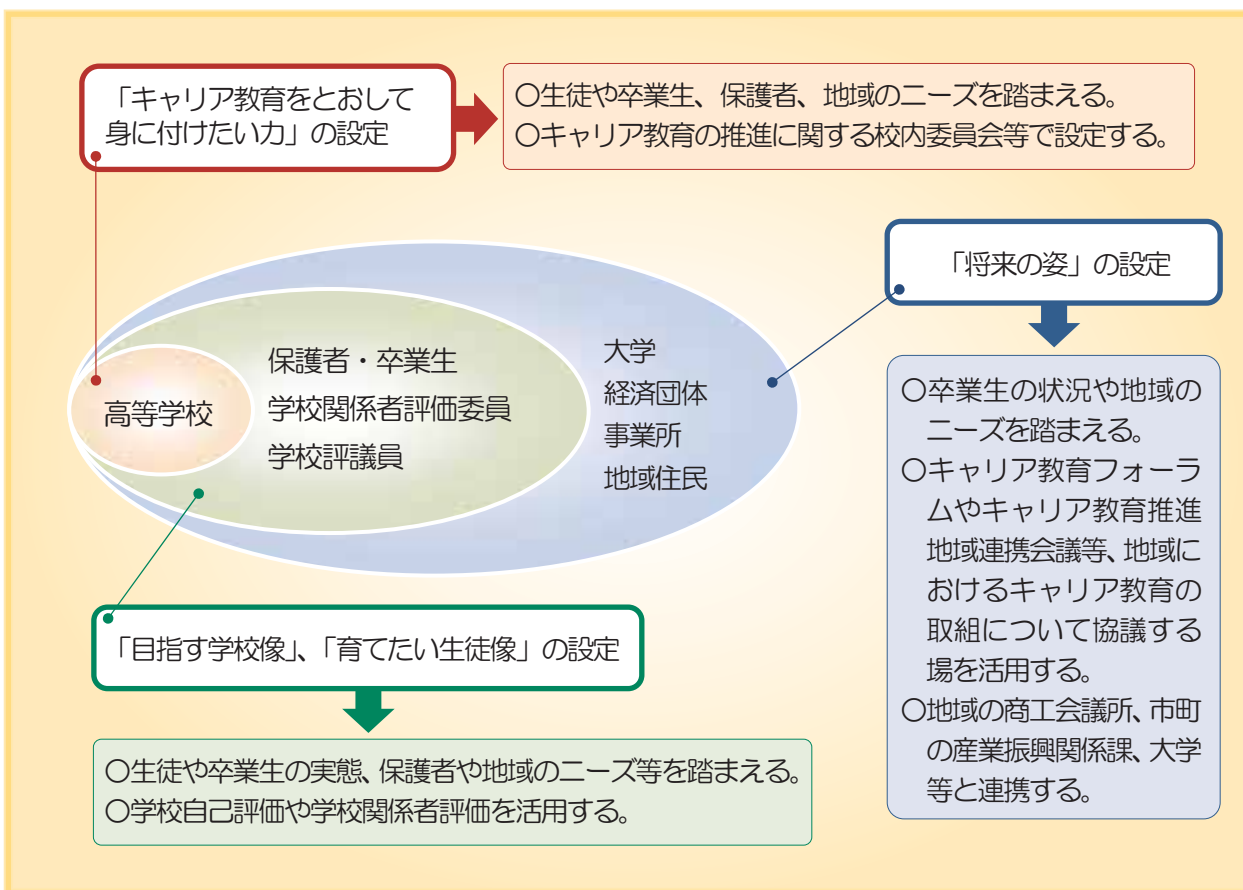
3 地域のニーズを把握する

○保護者や卒業生、地域の上級学校、経済団体、事業所、住民等から意見をもらう機会を設け、地域のニーズを把握しておきます。



TOPICS

キャリア教育に携わる多様な主体と目標設定



キャリア教育フォーラム



企業と学校の情報交換会



三重県版ようこそ先輩（※）



キャリア教育推進地域連携会議

（※）「三重県版ようこそ先輩」を、卒業生の状況やニーズを把握する機会の一つとして活用します。

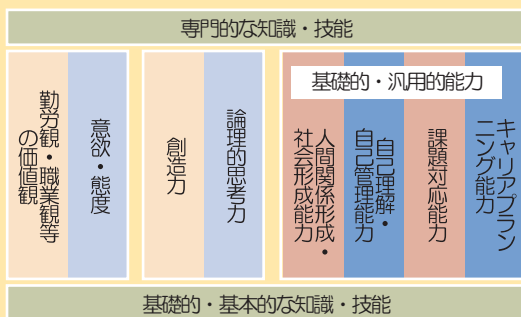
3 「キャリア教育をととして身に付けたい力」の設定

目指す方向の共通認識を図るために

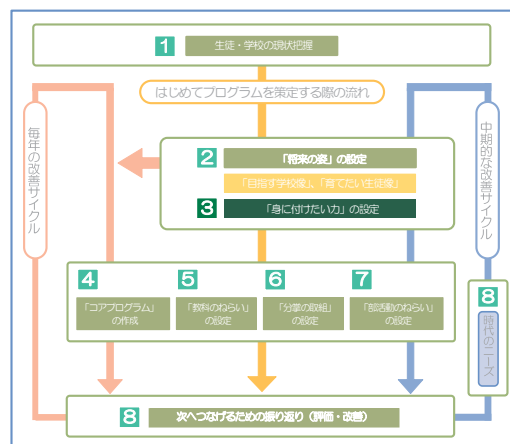
「キャリア教育をととして身に付けたい力」の設定では、キャリアが個人の生涯にわたる連続的な過程であることを意識し、「将来の姿」の実現に向けて、高校段階でどのような力を身に付けておく必要があるかを、学力(※)と基礎的・汎用的能力の観点から整理します。

設定にあたっては、生徒が学校での学習を日常生活や将来と結び付けながら、なぜ必要なのかを捉えられるようにすることが大切です。

「キャリア教育をととして身に付けたい力」の枠組



(※) 学力の要素には、この枠組みの「基礎的・基本的な知識・技能」、「専門的な知識・技能」、「意欲・態度」、「創造力」、「論理的思考力」等があります。



Point 1

地域の小中学校における「キャリア教育をととして身に付けたい力」を踏まえる。

Point 2

生徒や卒業生、保護者、地域のニーズを考慮する。

Point 3

すべての教職員が、組織的・系統的に育成できる力を設定する。

設定に向けたインプットとアウトカム

INPUT

- 「目指す学校像」、「育てたい生徒像」
- キャリア教育で目指す「将来の姿」
- 小中学校のキャリア教育における成果と課題
- 卒業生等が必要を感じている力の分析
- 保護者や地域のニーズ 等

OUTPUT

「キャリア教育をととして身に付けたい力」の設定

OUTCOME

- 「将来の姿」に向けた学びへの動機付け
- 確かな学力が備わった生きる力の育成
- 取組の重点化・焦点化 等

IN 「キャリア教育をととして身に付けたい力」の設定は、「目指す学校像」や「育てたい生徒像」を踏まえることが前提です。

IN 進路を決定した3・4年生や卒業生を対象にアンケート等を行い、キャリア形成に向けて学習しておきたかったことや、高校時代のキャリア教育が現在どのように役立っているか等を把握しましょう。

IN 生徒の学びや成長は、校種が変わっても途切れることなく続いています。小中学校で設定している「キャリア教育をととして身に付けたい力」を把握し、高校のキャリア教育へ接続することが大切です。

OUT 設定した「キャリア教育をととして身に付けたい力」を、教科や学年、分掌等の取組をととして円滑に育成できるよう、組織的・系統的に実践していきましょう。

設定の際に押さえておくべきこと

1 現状の確認

○生徒や学校の実態等を把握するとともに、教科や学年、分掌等で行われているキャリア教育の成果や課題を把握しておきます。

2 ニーズの把握

○在校生や卒業生、保護者、地域のニーズを把握しておきます。

- アンケートで把握する。
- 懇談会での意見等を参考にする。
- 地域の担い手育成の視点を意識する。

3 方向性の確認

○キャリア教育の目指す方向を確認しておきます。
○教科や学年、分掌等における当該年度の重点目標を確認しておきます。



TOPICS

基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力とその例

人間関係形成・社会形成能力

- 他者の個性を理解する力
 - 他者に働きかける力
 - コミュニケーション能力
 - チームワーク
 - リーダーシップ
- 等

自己理解・自己管理能力

- 自己の役割を理解する力
 - 前向きに考える力
 - 忍耐力
 - ストレスマネジメント
 - 主体的な行動力
- 等

課題対応能力

- 情報の理解・選択・処理能力
 - 課題を発見する力
 - 計画・立案する力
 - 実行力
 - 評価・改善を行う力
- 等

キャリアプランニング能力

- 学ぶことの意義を理解する力
 - 働くことの役割を理解する力
 - 将来設計力
 - 選択する力
 - 行動力
- 等

COLUMN

キャリア教育と「身に付けたい力」

◆ キャリア教育と「21世紀型能力」

「21世紀型能力」とは、学力の三要素を「課題を解決するため」の資質・能力という視点で再構成し、さらに「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の育成という学習指導要領が目指す知・徳・体を総合的に関連付けて捉えた上で、これからの学校教育で身に付けさせたい資質・能力として示したものです。

具体的には、「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」、その使い方を方向付ける「実践力」という三層構造で構成されています。

「キャリア教育をとおして身に付けたい力」の設定にあたって、これらの能力についても意識しましょう。

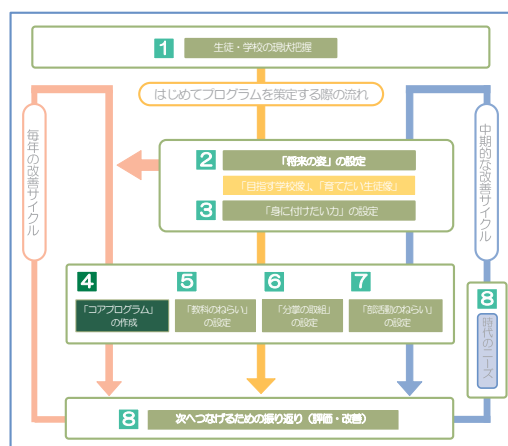


独自性のあるキャリア教育の実現のために

コアプログラムとは、学校が行っている教育活動の中から、生徒のキャリア発達を促す上で中心となる活動を取り出し、実施する時期や活動間のつながりを考慮して体系化したプログラムです。

入学から卒業までの限られた期間の中で、効果的に生徒のキャリア発達を促すためには、諸活動の適切な実施時期や順序を考えることが大切です。

生徒の発達段階に応じて、「いつ」、「どのような力の育成のために」、「何を」行うのかを考え、活動間のつながりを意識してコアプログラムを作成しましょう。



Point 1

すべての教育活動からコアプログラムに位置付ける活動を洗い出す。

Point 2

活動間のつながりや実施時期を十分に検討する。

作成に向けたインプットとアウトカム

INPUT

- 学校行事
 - ホームルーム活動
 - 教科活動
 - 部活動
 - 課外活動
- 等

OUTPUT 「コアプログラム」の作成

OUTCOME

- 学校のキャリア教育に必要な活動の把握
 - 適切な実施時期の整理
 - 活動間のつながりの整理
- 等

IN 在校生や卒業生のアンケート、保護者や地域のニーズ等をもとに、諸活動の成果と課題を検証し、コアプログラムに位置付けることで、より質の高いコアプログラムを作成することができます。

IN 学校や地域の特色を改めて確認しながら、コアプログラムに位置付ける諸活動を考えていくことにより、独自のコアプログラムを作成することができます。学校の伝統や実績を大切にしながらコアプログラムを作成しましょう。

OUT これまで行ってきた活動のつながりや実施時期を考慮しながらコアプログラムを作成することで、新たに導入したい活動や、なくしてもよい活動が明らかになります。

作成の際に押さえておくべきこと

1 方向性の確認

○キャリア教育における「将来の姿」、「キャリア教育をとおして身に付けたい力」、「学年の目標」等を確認し、キャリア教育の目指す方向を明確にしておきます。

2 学校の状況の分析

○生徒や学校の実態、保護者、地域、関係機関のニーズ等、様々な観点から学校のキャリア教育の状況を分析しておきます。

3 成果と課題の共有

○現在行っている教育活動が、キャリア教育の目指す方向性に合った活動になっているかを点検し、成果と課題を教職員で共有しておきます。

4 キャリア教育の再構築の準備

○教育活動の中から、生徒のキャリア発達を促すと考えられる活動を挙げておきます。
○先進事例等を参考に、新たに導入したい活動があれば、検討材料に含めるよう整理しておきます。

TOPICS

定期的な評価とコアプログラムの改善

○コアプログラムは、生徒や学校の実態、社会情勢の変化等に応じて定期的に評価するとともに、学校の特色と社会のニーズとの融合を図りながら改善しましょう。

○コアプログラムは1年で変えるものではありませんが、定期的な点検が必要です。作成から何年か経過したら、時代や社会のニーズに合っているかを確認しましょう。

短期

年度途中や年度末における教科や学年、分掌等での評価・改善

中期

概ね3年から5年を1サイクルとする評価・改善

COLUMN

望ましいコアプログラムの作成と運用に向けた視点

◆ 校内におけるコアプログラムの周知

コアプログラムは、特定の人だけではなく、教科や学年、分掌等の枠を超えて様々な立場の教職員で作成するようにします。そのことで、コアプログラムの意図を学校全体へ広めることができます。

◆ 他校の事例研究や現職教育の導入

コアプログラムの質を維持・向上するためには、ベンチマーキングや現職教育が有効です。多くの教職員が先進事例に触れることで、学校に足りない取組や新たな取組への気づきを得ることができます。

◆ 校外の諸機関と連携した学習機会の設定

すべての生徒が社会と関わりを持って生活しています。学校内だけでキャリア教育を行うのではなく、社会での体験的な学習の機会や、社会人と交流する機会をバランスよく配置しましょう。

◆ 学校独自のネーミング

学校のキャリア教育の取組に独自性や特色の付加価値を付けるために、個別の活動にネーミングを施すことも効果的です。生徒や教職員に活動のねらいが伝わるとともに、取組の特色化を図ることができます。

三重県版キャリア教育プログラムシートを活用したキャリア教育プログラムの策定では、教職員の対話を重視しています。

ここでは、複数の少人数グループで作成したコアプログラムの案を学校全体で共有し、学校としてのコアプログラムを作成するときのワークショップの例を紹介しています。

学校の状況に応じて、段階を省略したり、進め方を変更したりしてください。

準備物の例

- 年間行事予定
- 進路指導計画
- 年間授業計画
- 付箋（1人当たり30枚程度）
- 鉛筆、消しゴム
- コアプログラム作成シート 等

想定：1グループ5人程度

1 ワークショップのためのグルーピング

様々な立場から意見を引き出せるよう、教科や学年、分掌等のバランスを考えてグループをつくりま

2 キャリア教育の方向性の確認

「目指す将来の姿」や「キャリア教育をとおして身に付けたい力」等、キャリア教育の方向性を確認します。

3 必要な諸活動の洗い出し

一人ひとりが、生徒のキャリア発達に有効と考える活動を、付箋1枚につき1活動記入します。

4 諸活動の整理

書き出した活動をグループで共有し、重複している活動の付箋を1つにまとめます。少数の支持しか得られなかった活動は、コアプログラムに入れるかどうかを検討します。

5 付箋の仮置き

対話をしながら付箋をシートに貼っていきます。その際、活動の時期やつながりに気を付けま

す。なお、新たに導入したい活動が見つかった場合は、付箋を書き加えます。

ヒント

- コアプログラムに入れるべき活動かどうかを考慮し、仕分けましょう。
- 入学から卒業までの流れと活動間のつながりを意識しましょう。

6 仮置きした付箋の修正

付箋を仮置きしたシートを俯瞰し、入学から卒業までを見とおしたプログラムになっているかを確認して付箋の位置を修正します。

同時に、活動間の関わりについて、矢印（片矢印、両矢印）を施します。

7 全体会によるフィードバック

グループでの作成が終わったら、全体会で情報を共有します。その際に作成の過程を明らかにすることで、学校としての考え方の整理が進みます。

8 コアプログラムの作成に向けた意見集約

全体会での意見を踏まえ、各グループの代表と管理職、教科や学年、分掌の主任等により、学校独自のコアプログラムを作成します。

コアプログラム作成シートの例

県立〇〇〇〇高等学校 キャリア教育プログラム（コアプログラム）

社会の一員として、主体的に考え、社会に貢献することができる。/豊かな人生を送れるキャリアを積み上げることができる。

学 力	人間関係形成・社会参加能力	自己理解・自己管理能力	情報活用能力	キャリアプランニング能力
○基礎的・基本的知識・技能 ○思考力・判断力・表現力 ○学習能力 ○専門的知識・技能	○他者と関係を構築し、意思・感情を伝達する力 ○他者と協力し、社会の一員として役割を果たす力	○基本的人生的価値を確立する力 ○自己の強弱を認識し、主体的に行動する力	○情報の取捨・選択、解決・実行する力 ○自ら課題を設定し取り組む中で、他者と協働して課題を解決する力	○働くことの意義や役割を認識する力 ○ライフプランニングを適切に設定・実行できる力
1年生	活動月 夏休み 9月10日 全体会 11月 活動月			
	活動月 夏休み			

○ 県教育委員会 Web ページ掲載のプログラムシートも活用できます。

キャリア教育が効果的に展開されているかどうかを判断するためには、活動の内容や時期、成果等について検証することが必要です。

次の評価基準に従って、コアプログラムに位置付けた活動について評価を行い、改善しましょう。



○ 評価の例

◆ コアプログラムに位置付けた個別の活動について、次のように分類します。

評価基準

- A：必要な活動で、実施内容・時期ともにこのままでよい活動
- B：必要な活動だが、実施内容・時期を見直したい活動
- C：必要な活動だが、コアプログラムに含まなくてもよい活動
- D：中止または抜本的な見直しが必要な活動

○ 検証の例

◆ 評価結果をもとにコアプログラムについて検証します。

A評価 の活動が多い場合

内容や方法が確立していると思われます。
効果をより高めるために、他の活動との関連性について点検しましょう。
多くの教職員がこの評価をしている場合は、学校の取組を様々な媒体や機会をとおして地域や他校に発信します。近隣の高等学校等と情報を共有することで、互いの取組を高め合いましょう。

現在行っているキャリア教育を、自信を持って推進する。

C評価 の活動が多い場合

コアプログラムとは何かを再確認した上で、改めて作成してください。
キャリア教育プログラムに多くの活動があると、キャリア教育を進めているという安心感が得られるかも知れませんが、「あれも」「これも」ではなく、重点化・焦点化することが大切です。
C評価の活動を一度取り除き、改めて活動間のつながりや流れを確認しましょう。

学校のキャリア教育の柱となる活動を吟味する。

B評価 の活動が多い場合

キャリア教育に必要な活動がたくさんあるにも関わらず、形骸化していたり、内容が生徒や学校の実態、時代のニーズに合わなくなっていたりしている可能性があります。
実施する内容と時期、活動間のつながりに注意して入学から卒業までを見とおしたコアプログラムを再構築しましょう。

入学から卒業までを見とおした流れに組み替える。

D評価 の活動が多い場合

残念ながら多くの活動がうまく展開されていないようです。早急に、学校のキャリア教育に何が必要なのかについて話し合いましょう。
D評価の活動を中止することは簡単ですが、「キャリア教育に何が必要で、何が不要でないか」についてすべての教職員で検討し、課題を共有することが大切です。

現在行っているキャリア教育を原点に戻って練り直す。

○ 評価は、あくまで評価時点のものです。定期的な検証と改善が必要です。

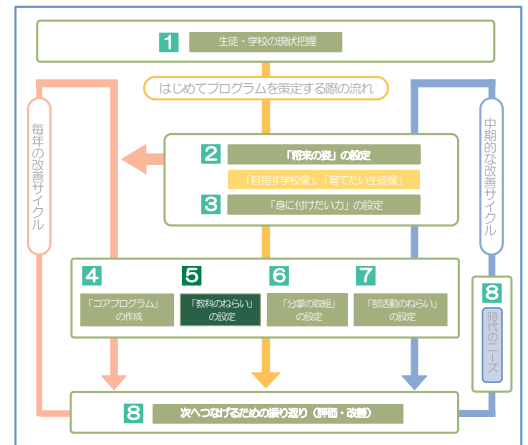
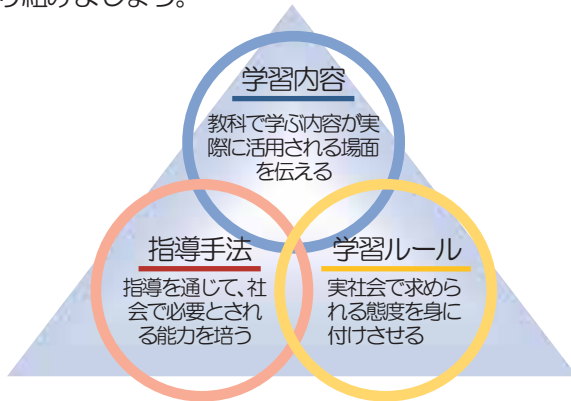
5 「キャリア教育の観点から見た教科のねらい」の設定

教科で必要な力を育成するために

キャリア教育は学校の教育活動全体を通じて体系的に行うものですが、中でも、生徒にとって学校生活の大半を占める授業において、生徒の学習意欲の向上と学習習慣の確立を促すよう実践することが大切です。

具体的には、教科の内容と社会生活や職業生活とのつながりを伝えたり、基礎的・汎用的能力を育てるために指導手法を工夫したりして、キャリア教育の観点から教科の学習を充実させるようにします。

どのようにして生徒の成長・変容を促すのかを常に問い直すとともに、既に行っている教科の学習を振り返り、キャリア教育と連動させて、生徒が主体的に学ぶ環境づくりに取り組みましょう。



Point1

学習内容と現在及び将来の生活を結び付け、生徒に学ぶ意義を理解させる。

Point2

他教科のねらいとの関連付けや、コアプログラムとのつながりを考える。



設定に向けたインプットとアウトカム

INPUT

- 学習指導要領
 - 「目指す学校像」、「育てたい生徒像」
 - 年間授業計画
 - 教科書・副読本・教材プリント
 - 生徒アンケートの結果
- 等

OUTPUT 「教科のねらい」の設定

OUTCOME

- 日常的なキャリア教育の実践
 - 教科横断的授業の実践と授業改善
 - コアプログラムの取組との連携
 - 生徒の学習意欲向上、進路実現
- 等

IN 学習指導要領に示されている教科の目標や内容等を踏まえ、教科間の連携を図ります。

IN 教科の特質を生かしたキャリア教育のねらいを設定するために、年間授業計画や教材を確認しましょう。

OUT 教科におけるキャリア教育のねらいを明らかにし、受動的な学習から能動的な学習へと転換を図ることで、生徒をより深い理解へ導きます。

OUT 各教科・科目、「総合的な学習の時間」、特別活動において、それぞれの目標とキャリア教育を関連付けることで、日々の学習や進路実現に向けた生徒の積極的な姿勢につなげることができます。

設定の際に押さえておくべきこと

1 学習内容の把握

○各教科・科目で扱う単元や題材の中で、日常生活をはじめ、職業や将来に関連する内容について、把握しておきます。

2 指導手法の研究

○生徒が主体的に発表や話し合い活動等を行えるよう、その手法について研究しておきます。

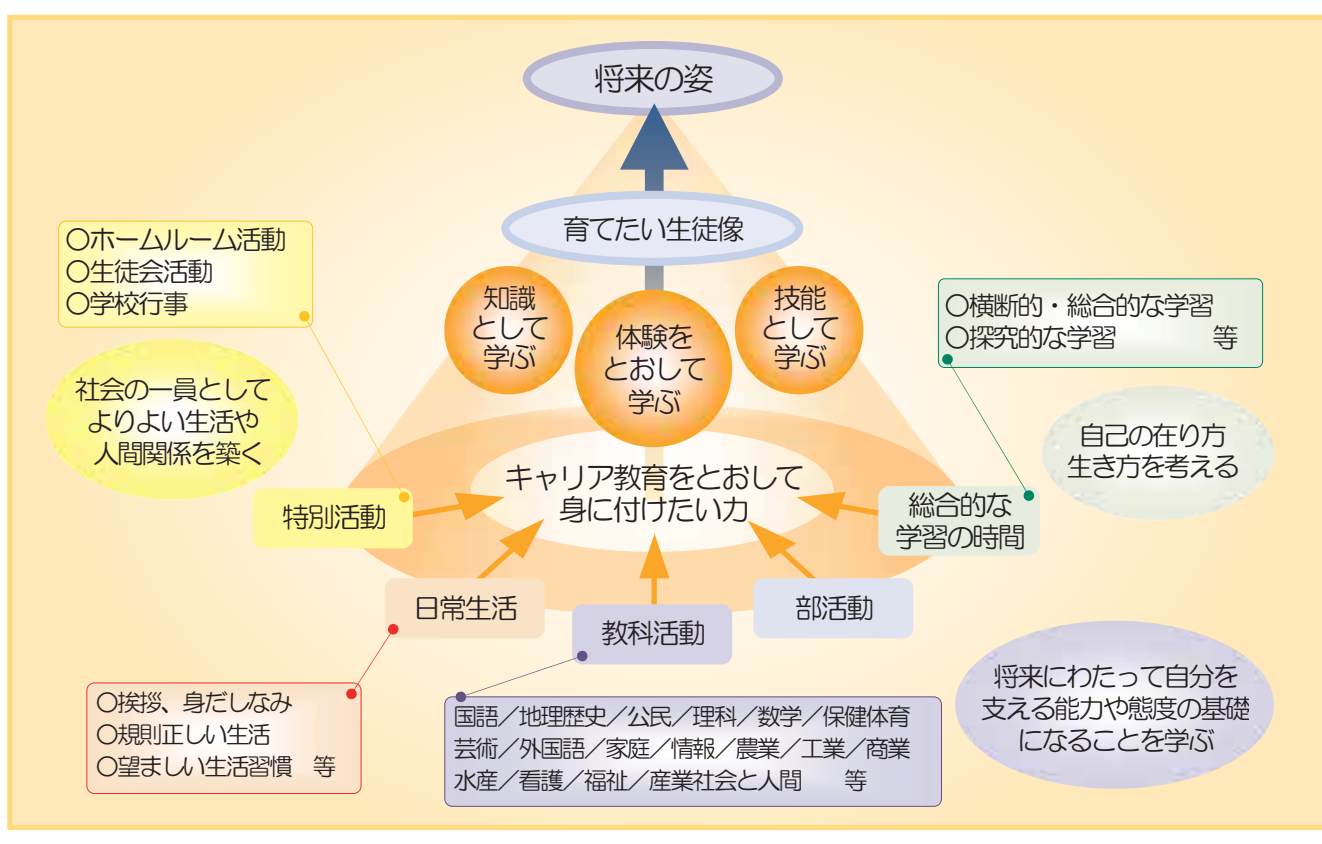
3 学習ルールの確認

○生徒のキャリア発達を促すために、統一した意識で指導する学習ルールを確認しておきます。



TOPICS

様々な活動とつながるキャリア教育 ～教科におけるキャリア教育の意識化～



COLUMN

教科におけるキャリア教育と授業改善

◆ 教科間の連携

組織的・系統的なキャリア教育を学校で展開するには、キャリア教育の視点から見た教科のねらいを学校全体で共有することが大切です。

教科の枠を超えて各教科の取組を知ることによって、教科間での連携が可能になります。



◆ 授業改善

授業において、学力や基礎的・汎用的能力が十分育まれているかを検証して、授業改善を行うとともに、教科の枠を超えて授業研究を行うことが大切です。

その際、生徒が主体的に学ぶことができるよう、言語活動を充実したり、アクティブラーニングを取り入れたりする等、指導手法を工夫・改善しましょう。

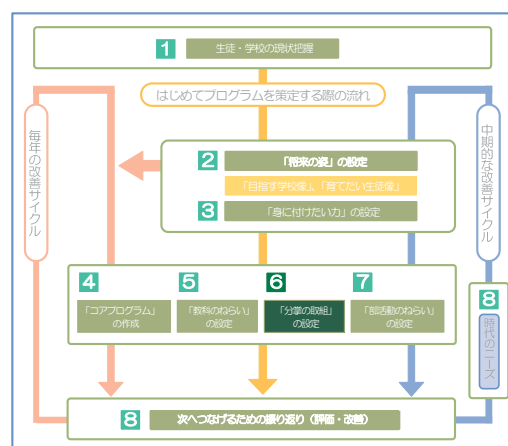
6 「生徒への関わりから見た分掌の取組」の設定

すべての教職員が生徒のキャリア発達に関わるために

学校生活の中には、日頃、キャリア教育として意識されていないことでも、生徒の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度の育成のために効果的な活動や取組がたくさんあります。

分掌における取組も、キャリア教育として重要な役割を果たすことを認識し、各分掌で生徒のキャリア発達を促すために、どのようなことができるか、何をすべきかを検討することが大切です。

一方で、必要な取組が増え、多岐にわたるに従って、「キャリア教育をとおして身に付けたい力」への意識が希薄になったり、取組が形骸化してしまったりすることがあります。取組の必要性や有効性について分掌の枠を超えて意見を出し合うことにより、分掌担当だけでは見えなかったことが見えてきます。



Point 1

担当分掌の枠を超えて、教職員全体で検討する。

Point 2

分掌の取組を振り返り、スクラップ&ビルドに取り組む。

設定に向けたインプットとアウトカム

INPUT

- キャリア教育で目指す「将来の姿」
- 「キャリア教育をとおして身に付けたい力」
- 学校の経営方針 等

OUTPUT 「分掌の取組」の設定

OUTCOME

- 生徒と向き合う時間の拡充
- 生徒にとって分かりやすい指導の実現
- 分掌における年間計画の作成 等

IN 「分掌の取組」を設定するにあたっては、キャリア教育で目指す「将来の姿」や「キャリア教育をとおして身に付けたい力」を確認し、学校の経営方針と照らし合わせながら、現在の分掌の取組について検証します。

IN その際、分掌間での活動の重なりや不足する活動、現状に合っていない取組が見えてきます。それらの取組を重点化・焦点化することで、学校経営の軸が明らかになり、縦（学年）と横（分掌等）がつながっていきます。

OUT 「分掌の取組」を検証することで業務のスリム化が図られ、生徒と向き合う時間を生み出すことができます。また、教職員全体が目指す方向を共有することで、一貫した指導へとつながります。

設定の際に押さえておくべきこと

1 方向性の確認

○「目指す学校像」や「育てたい生徒像」を確認しておきます。

2 分掌の取組の確認

○「キャリア教育をとおして身に付けたい力」を育成するために各分掌が行っている取組を確認しておきます。

3 課題の意識化

○教職員一人ひとりが、日頃から各分掌の取組の成果と課題や取り組むべきことを考えておきます。



WORK

ワークショップによる「分掌の取組」の設定の例

「分掌の取組」を設定する際、分掌ごとに検討するのではなく、様々な考え方や見方を融合することが大切です。

ここでは、分掌の枠を超えて、学校や分掌の重点取組を検討するときのワークショップの例を紹介します。

想定：1 グループ5人程度

準備物の例

- 各分掌の年間指導計画
 - 付箋（1人当たり30枚程度）
 - サインペン（3色程度）
 - ワークシート
- 等

1 ワークショップのためのグルーピング

様々な立場から意見を引き出せるよう、教科や学年、分掌等のバランスを考えてグループをつくりまします。

2 活動や取組の洗い出し

「キャリア教育をとおして身に付けたい力」を育成するために、各分掌で行っている取組や新たにやりたい取組を理由とともに付箋に書き出し、意見を出し合います。

3 活動や取組の構造化

付箋に書いた取組をどの分掌で行うと効果的かを考えながら、「引き続き行う取組」、「新しく取り入れる取組」、「なくす取組」に分け、ワークシートに貼って話し合います。

4 各グループからの発表

話し合った内容を代表者が発表します。

ヒント

- 現在行っていることと異なる考え方や取組を中心に、理由を添えて発表しましょう。
- 分掌で連携して取り組んだ方が効果的なものについては、解説を加えましょう。

5 情報共有・共通認識

グループの発表を受けて、各分掌の主任が意見や実現の可否を発表します。

6 取組の重点化

各主任の発表を受け、「キャリア教育をとおして身に付けたい力」の実現に向けてやるべき取組を検討し、重点化します。

ヒント

管理職が同席することにより、次年度の計画に生かされやすくなります。

7 各分掌での振り返り

各分掌において、今回のワークショップでの話し合いをもとに振り返りを行い、分掌としてのキャリア教育の在り方を再点検します。

ワークシートの例

分掌	学年	教務	進路	生徒指導	保健
引き続き 行う取組	付箋	付箋	付箋	付箋	付箋
	付箋	付箋	付箋	付箋	付箋
	付箋	付箋	付箋	付箋	付箋
新しく取り 入れる取組	付箋	付箋	付箋		
	付箋	付箋	付箋		
なくす取組	付箋	付箋		付箋	付箋

付箋の例

分掌の枠を超えて連携が必要な場合は、サインペンで付箋をつなぐ。

企画を立てて、実行に移す力を育むための「文化祭」

7 「キャリア教育の観点から見た部活動のねらい」の設定

部活動をととしてキャリア教育を進めるために

生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動は、異年齢集団における人間関係形成能力や同じ目標に向かって取り組む連帯感、挑戦する心と意欲等が育成できる場であり、生徒のキャリア発達を促す絶好の場面です。

教員一人ひとりが、部活動顧問として、生徒のキャリア発達に部活動がどのように関わっているかを意識し、生徒に働きかけていきましょう。

学習指導要領における部活動の位置付け

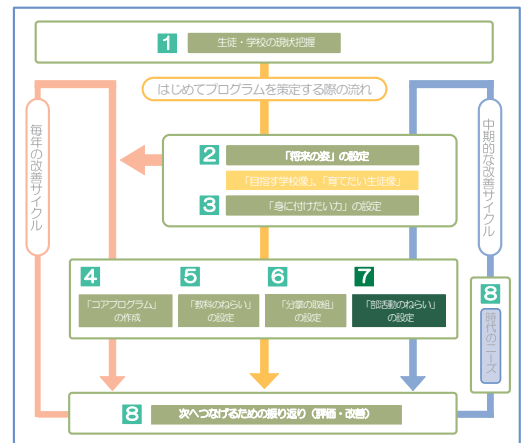
部活動の意義

スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養、互いに協力し合って友情を深めるといった好ましい人間関係の形成等に資するものである。

留意点

各教科等の目標及び内容との関係にも配慮しつつ、生徒自身が教育課程において学習する内容について改めてその大切さを認識するよう促す等、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるようにする。

(出典：高等学校学習指導要領解説 総則編)



Point 1

部活動が、生徒のキャリア発達を促す絶好の場面であることを意識する。

Point 2

キャリア教育の視点で部活動の意義や目標を捉え直す。



設定に向けたインプットとアウトカム

INPUT

- 「目指す学校像」、「育てたい生徒像」
- 各部の活動方針
- 生徒や保護者、地域のニーズ 等

OUTPUT 「部活動のねらい」の設定

OUTCOME

- 学校としての統一したねらいにもとづいた部活動の実現
- 「部活動をととして身に付けたい力」を意識した活動の充実 等

OUT

すべての教職員が、多様な学びの場である部活動をキャリア発達を促す機会と捉え、各部において活動方針を立てるとともに、学校としての「部活動をととして身に付けたい力」を共有します。

OUT

「部活動をととして身に付けたい力」を意識することで、部活動以外の場面においても、教育的効果を高めることができます。



設定の際に押さえておくべきこと

1 各部の活動方針の共有

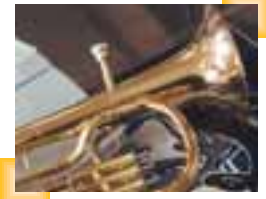
○すべての教職員が各部の目標や活動方針を共有しておきます。

○部活動の紹介冊子等に記載することで、共有しやすくなる。

2 生徒のニーズの把握

○部の枠を超えて、生徒の自己目標やニーズを共有しておきます。

○「部活動ノート」やミーティング等から把握する。



TOPICS

部活動におけるキャリア形成に向けたねらいの例

● 美術部

○自己の表現したい内容に応じて、新しい表現方法に挑戦する心と意欲を養う。
○他者の作品について、客観的に批評する論理的思考力と表現力を身に付ける。

● 吹奏楽部

○個人やアンサンブル全体の課題を発見し、解決に向けた目標を設定することができる。
○調和を大切にするチームワークと協調性を身に付ける。

● ボランティア部

○他者に配慮した関わりを持つことができる。
○社会における自己の役割について考え、行動することができる。

学校における「部活動のねらい」の例

自己や集団の目標に向かって、
○仲間と挑戦する心と行動力を育む。
○人と関わる力を身に付ける。
○強い精神力と忍耐力を養う。

● 陸上競技部

○辛い状況に耐えることのできる強い精神力を養う。
○自己の目標タイムを設定し、練習計画を立て実行することができる。

● 剣道部

○礼を重んじ精神を磨き、人格を高めようとする態度を養う。
○より上位の段の取得を目指し、自己の目標を設定して練習に励むことができる。

● 野球部

○チームで目標を設定し、厳しい練習に一体となって取り組むことでチームワークを身に付ける。
○選手相互の信頼関係を高めるために、他者の立場や感情を尊重した言動をとることができる。

COLUMN

部活動をよりキャリア発達を促す場面とするために

◆ 各部のスローガンの共有

各部の目標を学校全体で共有し、学校としてのスローガンをつくります。

そのことで、学校教育の様々な場面で、すべての教職員が、同じ視点に立って生徒に向き合うことができます。

◆ 仲間意識の醸成

運動部では、選手として活躍する生徒だけではなく、控え選手として学校生活の大半を過ごす生徒もいます。チームの一員として同じ目標に向かって進む仲間意識を醸成することもキャリア発達を促す上で大切なことです。

◆ ねらいの共有

学校のホームページや部活動の紹介冊子を作成する際に、各部の活動内容と合わせて部や学校としてのねらいを記して生徒へ伝えることで、ねらいの共有化を図ることができます。

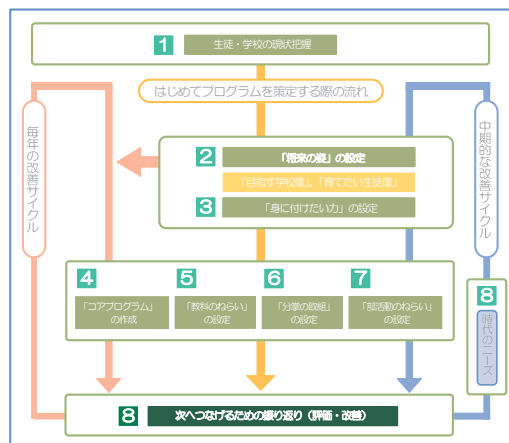
より質の高いキャリア教育を行うために

キャリア教育の改善にあたっては、生徒の成長や変容の実態を把握し、学校で行ってきたキャリア教育全体を検証することが大切です。



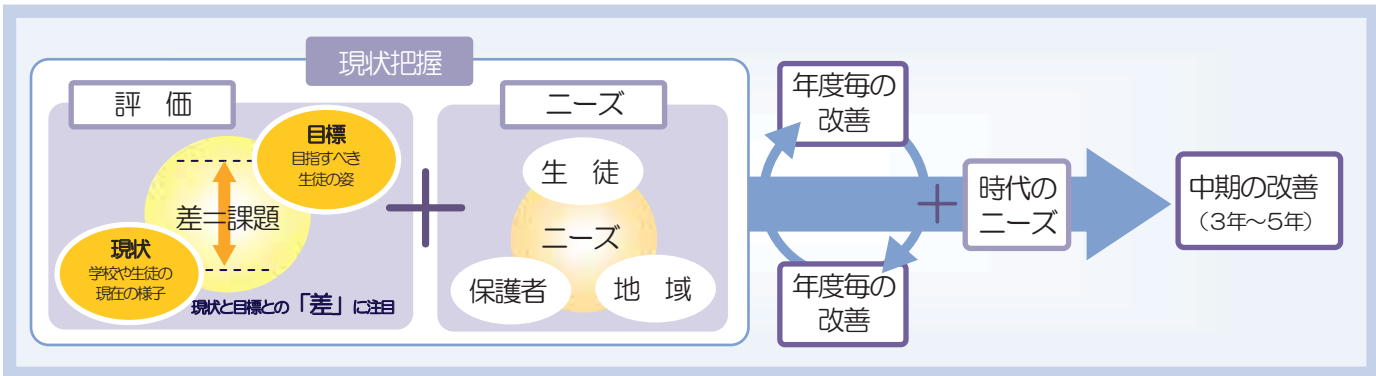
年度途中でキャリア教育の年間計画に修正を加え、年度末には「キャリア教育をとおして身に付けたい力」の育成のためにどのような活動が必要かを、教職員が現状を踏まえた上で、対話をとおして検証します。

その際、教職員の評価だけではなく、生徒や保護者、地域の評価を取り入れることが大切です。学校で行っている各種アンケートや学校自己評価、学校関係者評価等を活用しましょう。また、保護者や地域のニーズについても把握し、改善に生かしましょう。



Point 1
取組の目的を明確にし、定量的・定性的評価を行い、改善する。

Point 2
学校に求められているニーズを捉える。



次へつなげるための振り返りに向けたインプットとアウトカム

- INPUT**
- 学校の経営方針
 - 学校自己評価、学校関係者評価
 - 各種アンケート
 - 保護者や地域のニーズ
 - 年度途中の振り返り 等

OUTPUT 次へつなげるための振り返り

- OUTCOME**
- キャリア教育プログラムの改善点の把握
 - キャリア教育プログラムの基礎づくり 等

IN 生徒や学校の年度当初の実態と、年度末の振り返りを踏まえて明らかにした実態を比較することで、1年間の生徒の成長と変容を見ることができます。

OUT 教育活動の改善を図るには、1年ごとに振り返りを行うのはもちろんのことですが、3年から5年ごとに、これまでの取組の成果と課題を総合的に確認する必要があります。

経年データをもとに、生徒の成長や変容を的確に捉え、保護者や地域のニーズ、社会や時代の変化に対応すべく、キャリア教育プログラムを再点検し、中期ビジョンへつなげていきましょう。

改善活動の際に押さえておくべきこと

1 方向性の確認

○キャリア教育の目指す方向性を確認しておきます。

2 年度途中における状況の整理

○年度途中に活動状況を振り返り、必要に応じて内容の修正をしておきましょう。このことで、年度末の振り返りを円滑に行うことができます。

3 年度末の振り返り

○年度末に「キャリア教育をとおして身に付けたい力」の達成状況を確認しておきます。

○生徒や教職員だけではなく、保護者や地域等の評価結果を把握しておきます。



WORK

1 年間の生徒の成長や変容をもとにした振り返りの例

生徒の成長や変容を多面的に捉え、キャリア教育の成果と課題を検証することで取組の改善が進みます。

ここでは、年度当初と年度末に行ったアンケート結果を活用したキャリア教育の振り返りの例を紹介します。

想定：1グループ5人程度

準備物の例

- 各種アンケート結果
- 付箋（1人当たり2色各20枚程）
- ワークシート

等

1 ワークショップのためのグルーピング

様々な立場から意見を引き出せるよう、教科や学年、分掌等のバランスを考えてグループをつくります。

2 キャリア教育のねらいと取組の確認

年度当初に設定した「キャリア教育をとおして身に付けたい力」の育成を目指して行った取組を付箋に書き、ワークシートに貼ります。

3 アンケート結果等の共有

年度当初と年度末に行ったアンケート結果等をもとに、生徒の成長や変容についてグループで話し合い、達成度を言葉やパーセンテージで表します。

ワークシート（マトリクスシート）の例

生徒の成長や変容をもとにした振り返り					
身に付けたい力	学力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
取組	取組	取組	取組	取組	取組
達成度					
効果的である	取組 理由	取組 理由	取組 理由	取組 理由	取組 理由
効果が少ない	取組 理由	取組 理由	取組 理由	取組 理由	取組 理由
改善策	インナーシップの事前学習に話し合い活動を入れる				

4 取組の分析

生徒の成長や変容に寄与した取組、成果の上がらなかった取組について、その理由を付箋に書き、ワークシートに貼りながら改善策について話し合い、その結果を全体で発表します。

5 キャリア教育プログラムの見直し

話し合いで出た意見をもとに教科や学年、分掌等で改善策を検討します。

ヒント

学校の経営方針に立ち返りましょう。

6 次年度の重点取組等の確認

それぞれの意見をもとに教科や学年、分掌等が考えた改善の重点事項を学校全体で共有します。

ヒント

ワークショップの結果を次年度の計画に反映することで、PDCAサイクルを円滑に回すことができます。

ヒント

達成度の評価については、年度末の生徒の姿だけを捉えるのではなく、年度当初と比較して生徒の成長や変容の過程を捉えるようにします。

そのために、アンケートの書式や実施時期等を工夫しましょう。